

In the discussion of vocational planning, the data on self-knowledge is used with careful insight to aid the student to take a comprehensive view of all the available data which has been gathered about him in the school records. "New Trends in Career Day Planning" are helpful, as is the emphasis on having all departments of the school participate in the student's vocational planning. The author presents an ideal at this point, as well in other places in the book, of widespread participation of the teaching staff, but she does not offer a plan to secure such participation. The participation of the faculty is increasingly difficult at the college level, and in schools and colleges where there are few full time personnel workers.

There is a fine emphasis in various sections of the book on using the curriculum in the study of personality; for teachers to be aware of "teachable moments." Such awareness should eventually reduce the number of emotionally disturbed adults if teachers are trained to know how to meet those moments.

The Appendix contains useful data, including appraisal check lists, Vocational Planning Guides, a Pupil Judgment Test, and a fine bibliography of visual aids. (Marie Bale)

Jones, Arthur J. *Principles of Guidance*. 5th ed.
New York. McGraw-Hill. 1963.

全米職業指導協会 (National Vocational Guidance Association) が創立されてから、今年でちょうど 50 年になる。Jones が *Principles of Guidance* の初版を出版したのは 1930 年で、その年から数えると、今年が 33 年目になる。この間に、米国の学校におけるガイダンスは、内容的にも、方法的にも著しい進歩がみられる。Jones 自身、この第 5 版の出版にあたって、過去 30 年間の変化について、ほとんど想像しがたい程であ

ると述べている。この本のていさいや内容も、これまでの版と比較すると、全く新しくなっており、別の本のような感じさえうける。

さすがに、斯道の権威が、ながい経験と、豊富な知識とにもとずいて書いたものだけあって、内容がよく整理されていると共に、著者の主張が、全巻を通して、はっきり示されている。英文もわかりやすく、表現も簡潔なので、外国語に不馴れな者にも読みやすい感じをあたえるから、ガイダンスに関心のある日本の学生、教師、学者に一読をすすめたい。

各章のおわりに、練習問題がつけられているところからもわかるように、著者は、この本を教科書として書いたと思われる。しかし、日本の大学の状況では、学部を卒業してすぐ大学院に進む者が多く、教育の現場を実際に何年が経験してから、修士コースに入る者がまだ少いので、この本を読んでも、現実の問題と照合しながら、自らの考えを深めていくことはむづかしいかもしれない。その意味では、むしろ、現場で、生徒指導の問題に真剣に取り組んでいる教師たちに読んでもらいたい気がする。志ある教師たちが集って、この本を参考にしながら、それぞれの学校の生徒指導や特別活動などの原理についての研究会も開いたならば、極めて有効であろうと思われる。

序文において、Jones は Guidance と Personnel Work という述語のつかいかたについてのべ、この本では Guidance を用いることにしたと述べているが、第15章の将来への展望の部分では、いずれ、この Guidance という用語は “Pupil Personnel Services” という述語に置き換えられるべきだとしている。何故、述語のことが問題になるのか、何故変える必要があるのかについての著者の意見が十分に示されていないこともあって、われわれには、その理由がよくわからないのは致しかたがない。

本書を通して著者が一貫して主張している点は、

- (1) ガイダンスは個人の生長発達を援けるものである。
- (2) 自己理解、自己概念の確立、将来の進路や目的の選択・決定などは、すべて、ひとりひとりの人間が自分でしなければならないことで、親、教

師、カウンセラーなどは、個々の生徒が、自主的に賢明に道を選び、満足して生きてゆけるように援助するだけである。子供にかわって、あるいは、子供のために道を見つけてやったり、職業を選んでやったりすることはできない。子供と共に考える態度が必要である。

(3) ガイダンスは、学校の全職員が、すべての施設や機関を通して、あらゆる業務の中で、おこなっていかねばならないもので、ガイダンスやカウンセリングの専門家だけにまかせてはならない。協力こそもっとも大切なものである。この協力は単にひとつの学校内にとどまらず、学校のスタッフと、親、地域社会にある諸機関、また上級・下級の学校との連繋においても考えられなければならない。

こういう考えかたは、理論的には至極当然のことといえるのであるが、実行するのはむずかしい。ガイダンスについて、このような立場にはつきり立って、原理論や方法論を展開し、プログラムを述べている著書は案外少いのではないかと思う。ガイダンスを担当するのは、学校の全職員であり、ガイダンス・プログラムは学校のあらゆる業務の中でおこなわれなければならない。ガイダンスの専門家の重要な役割のひとつは、すべてのガイダンス・プログラムの連絡調整 (coordination) をおこなうことであるという考えかたが、表明されるようになったのは、米国でも近年のことであるといえよう。管理者としての校長が、深い関心をもち、広範囲のガイダンス・プログラムが展開できるような措置をとることが重要である、とする著者の意見に同意するものであるが、どうしたら、そうなるかという問題はいまなお残されている。日本の読者にとつても、これらの著者の主張は、日本の学校の現状と照し合せながら十分検討すべきものであると考える。

本書は原理を述べたもので、方法論を展開するものではない。いわゆる How to ものが多くなり勝ちななかで、原理だけを明確に展開しているところに、本書の特徴があるといえるが、それだけに、日本の学校において、山積する問題と取組んでいる現職の教師としては、ではいったい、この原

理を現状の中に生かすには、どうしたらいいのか、という問題にぶつかるであろうが、それに対する解答や示唆を本書に求めることはできない。

学級指導やガイダンスはあくまで、個人の生長をはかることを目的としたものであるとする、個人中心的な考えかたは、米国のガイダンス論者に共通するものであると思われるが、この点では、集団主義教育を強調する立場からみると、物足りないところが多いと思える。それにしても、集団指導に関する事項が少なすぎるように思える。

また、ガイダンスの方法と技術についての章で、カウンセリングだけにしかふれていないのも、個人指導に重点をおいているからかもしれないが、なにか満足できない感じが残った。ガイダンスの中心はカウンセリングであるかの如くみえる、この取扱いかたは、少くとも、日本の現状には不十分といわざるを得まい。

小学校のガイダンスについての章がもうけられたのも、新しい点のひとつであるが、米国においては、組織的ガイダンス運動が、次第に小学校のレベルにまで下ってきたことが、はっきりあらわされていて面白い。その他、多くの面で、最近の資料、傾向を、ていねいに取入れている点は感心させられる点が多い。しかし、一面においては、明解かつ簡潔であるため、読了後深く考えなければならなくなる程の刺戟をうけることもないように思え、やはり、入門的教科書かな、という感じが残る。

とはいえ、たしかに、本書は、はっきりした、ひとつの立場からガイダンス論を展開しており、その立場は、日本の学校の将来のありかたを考える時にも、是非考慮したい諸点を含んでいる。そういう意味からも、本書は、ガイダンスに関心をもつひとびと、校長などの管理職にある者、教育行政にたずさわるひとたちなどに一読をすすめたい本である。

(都留 春夫)